
臨床社会学の方法

(37) 男性学のすすめ

—コンネル『マスキュリニティーズ—男性性の社会科学』刊行の意義—

中村 正

1. 27 年目にして日本語版

男性学の世界的な牽引者であるレイウィン・コンネルの *Masculinities* 第 2 版がようやく翻訳刊行された (レイウィン・コンネル著/伊藤公雄訳『マスキュリニティーズ—男性性の社会科学』新曜社、2022 年)。私も下訳を担当し、解説を書いている。原著初版は 1995 年だ。その時、私はアメリカのカリフォルニア州サンフランシスコ市と湾をはさんで東にある大学の街、バークレー市にいた。カリフォルニア州立大学バークレー校 (UCB) で客員研究員をしていた。著者のコンネルは同じ UC サンタクルツ校の教授を務めていた。コンネルとはその時アメリカで出会うことはできなかったが後に男性学の集いでお会いすることになる。本書は世界各国語に翻訳されている。日本語版の刊行は大幅に遅れた。出版直後に翻訳を決意し監訳者の伊藤さんに相談してから 27 年経っている。

コンネルは 1944 年生まれ。これまでマッコーリ大学 (オーストラリア)、カリフォルニア州立大学サンタクルツ校、ハーバード大学などで教鞭をとり、その後母校でもあるシドニー大学に勤務し、現在は名誉教授となっている。社会学を主たる専攻としながらも、その学問的経歴は多彩である。学

部から大学院にかけて、心理学、歴史学、政治学、教育学などを修めた。文字通り、人文社会科学的な幅広い知識に裏打ちされた研究であることは本書からも読み取れる。経歴からその総合的な視野形成がわかるので、翻訳のサブタイトルを「男性性の社会科学」と総称した。

翻訳を精査している最中、彼がホスト教授になってくださりシドニー大学にて客員研究員をさせていただいた。2003 年から 2004 年のことである。同じ時期に翻訳を担当した男性学研究者の多賀さん (関西大学) もシドニー大学で一緒だった。訳語の意味を明確にするためにコンネルに質問をすることもできた。贅沢な時間を過ごした。最終は監訳者の伊藤さんが点検してくださった。書物の構成は次の通りである (目次を抜き書き。下線は章のタイトル)。

研究領域の拡大/論争と諸困難/グローバルな局面/結論。第 I 部 知識とその問題—第一章 男性性の科学 (対抗する知/臨床的な知/男性役割/新しい社会科学/政治的な知/知の対象、第二章 男性の身体 (真の男性性/機械、風景と妥協案/逃げることのできない身体/泥と血の複合/バンクォーの亡霊—身体—再帰的实践/世界の形成、第三章 男性性の社会的組織 (男性性の定義/社会的実践の構造としてのジェンダー/男性性の間の諸関係—ヘゲモニー・服従・共謀・周辺化/歴史的ダイナミクス、暴力そし

て危機傾向。第 II 部 男性性のダイナミクスに関する四つの研究—第四章 生き急ぎ、そして若くして死ぬ (グループと文脈 / 抽象的労働 / 暴力と国家 / 男性にとっての強制的異性愛 / 集合的实践としての男性性 / 抗議的男性性 / 他の道筋 / 逸脱した男性性とジェンダーのポリティクス、第五章 完全なる新世界 (関与のモメント / 距離をとること / 環境保護運動 / フェミニズムとの出会い / 分離のモメント / 男性性の消滅 / 争うモメント、第六章 とてもストレートなゲイ (関与のモメント / 砂の粒—セクシュアリティ / ゲイになること—アイデンティティと関係性 / 複数の男性性の諸関係 / 変化に直面する / 投企と歴史としてのゲイの男性性、第七章 理性の男たち (男性性を構築する / 理性をつくりあげる / キャリアと職場 / 非理性的であること / 理性と変化。第 III 部 歴史とポリティクス—第八章 男性性の歴史 (近代的なジェンダー秩序の形成における男性性の生成 / 変容 / 現在のモメント、第九章 男性性のポリティクス (男性の政治と男性性のポリティクス / 男性性のセラピー / 銃のロビー活動—ヘゲモニックな男性性の防衛 / ゲイリベレーション / 脱出のポリティクス、第十章 実践とユートピア (歴史的意識 / 行為の目的 / 脱ジェンダーと再構成 / アクションの形態 / 教育 / 今後の展望。補論 男性性をめぐる現代のポリティクス—現代の家父長制への男性の関心—バランスシート図 / バックラッシュ—変化に抗しようという男性たちの関心を動員する / 新自由主義と男性の利害 / 暴力の問題—対人的暴力と国際的暴力 / 世界規模での男性性のポリティクス。解説 (中村正) —グローバルイゼーションとマスキュリニティーズ。

少し整理すると、本書は次の 5 つのことを体系化し、男性学創生に向けた研究書と言えるだろう。頻繁に引用されるようになっている。

1) 男性性についての近代西欧の歴史を概

括すること (第 1 章)

2) ジェンダーの社会理論に具現されている男性性の理論を提示すること (第 2-3 章)

3) 変化の過程にある 4 つの男性グループの生活を記述すること (第 4-7 章)

4) 西欧の男性性の歴史とそれらの政治的表現を統合すること (第 8-9 章)

5) ジェンダー平等のポリティクスの戦略を提案すること (第 10 章)

2. 男性学創生の書として

コンネルは世界を渡り歩いている。何度か来日している。学術会議、国際学会、国際機関の会議組織、世界各地の大学院での集中講義などである。シドニー大学に在籍の間は、研究室や図書・資料の閲覧などの便宜を図る労をとってくださるなど常に配慮をしてくれた。シドニー大学の広いキャンパスのなかに点在するオープンエアーのカフェで質問に答えていただいた。大学門前の学生街・グリーブ通りにも出かけ、書店、カフェ、レストラン、公園等で話をしてくださった。こうした機会を利用しながら翻訳作業が進められたことは幸運だった。著者と時空間を共有しながらの作業は本書の理解に臨場感を与えてくれた。

その話のなかで、原著から当時ですでに 10 年経っていたので、その間の研究関心や男性・男性性をめぐる研究動向について記したものを、是非、日本語版序文として寄せて欲しいと依頼した。すでに本書の第 2 版を準備しているということだったので、それを補論として日本語版に追加することにした。訳出したように 10 年の間の研究経過を詳細に追記した補論である。

本書刊行後、コンネルは男性・男性性をめぐる応用的な問題領域の開拓や批判に応答

しながらジェンダー研究の視点をさらに深める研究を展開している。ここでは簡単にこの翻訳書刊行の意義とともにコンネルの研究を紹介しておきたい。

翻訳のための会話をしながらも話題は常に世界の男性性研究のことへと展開し、私がいろいろ教わることになった。そのなかで、私が話題にできたことは、日本の男性性研究やアジア社会の男性性研究のことである。つたない英語での説明だったが深く関心を示してくださった。アメリカのアジア戦略やアジアにおける戦争の歴史、日本の位置などが刻み込む地政学的な男性性のあり方は、たとえば戦争体験者の聞き取りについて男性性の見地から取りくむことが必要だろうと話した。加害（アジア・オセアニア諸国への）と被害（アメリカによる原爆や沖縄での市民の犠牲）の二重性を戦争体験として男性性の視点からいかに語ることができるのか、そしてそのことが戦後日本の社会変動を導いた男性性とどのように連続しているのか不連続なのかなどの論点を紹介した。

グローバル化の社会変動は激しく、それとともに男性性の様相も多様化している。ではアジアあるいは日本の男性性はいかなる国際的な特徴をもつのだろうか。非西欧圏での研究についてはオリエンタリズムの影響が回避できない。その言説を内面化しているかもしれないという内なるオリエンタリズム意識をいかに相対化できるだろうかという関心から、アジアの男性性を語る言葉を自生させるべきことを話した。しかしなお西欧出自のジェンダーやセクシャリティ、社会学や社会科学の言説それ自体をとおしてしか認知できないことのジレンマ

に陥りながら、苦しい翻訳作業となることも話した。こうした独自の文化圏にある認知の仕方の特性が翻訳にはつきものだ。この立場をよく理解してくださり、だからこそ、西欧文化出自の本書の内容とは異なる男性性があるのだから、翻訳はそれを重ねるためのよい機会となるとも語ってくださった。

話の共通点は、男性と男性性を対象にすることへの期待・可能性と男性学がバックラッシュに利用されていくだろうからその準備もしておくことが大切だということもすでにその時話されていた。

本書をとおしたコンネルの男性性ジェンダー研究への最大の功績は、「覇権的な男性性」の概念を展開し、男性学のダイナミズムをつくり出したことである。これはイタリアの思想家、アントニオ・グラムシのヘゲモニーとマスキュリニティーズをつなげた概念だ。この「ヘゲモニックなマスキュリニティ」という概念がその後の男性・男性性、ジェンダー研究で引用される頻度は格段に高い。

私もグラムシのヘゲモニー概念について検討したことがある。「地平としての文化—グラムシの文化社会学」（松田博編『グラムシを読む—現代社会像への接近』法律文化社、1988年）、「市民文化とヘゲモニー—グラムシと現代文化」（松田博・鈴木富久編『グラムシ思想のポリフォニー：現代性と古典性のインターフェース』法律文化社、1995年）を寄稿している。

次に、本書の理解のためにも日本での男性・男性性についての議論の経過を整理しておこう。男性学は女性解放運動の波から起こった。70年代には、「男性の性役割」を

改革しようとする小さなメンズリベレーション運動さえ起こった。日本は 90 年代だった。これは男性、権力、変化についての興味あるポリティカルな議論を引き起こした。しかし、現実の男性や少年とは何であるのかについての多くの研究を直接に産み出したわけではなかったと語る。そしてジェンダーの概念的な混乱に深く苦しんでいたとコンネルはいう。それは男性研究としてではなくこれまで無意識に語られてきた男性論が作り上げていた擬似的な男らしさ論を俎上にのせるやっかいさのことだ。「何故なら、かなり一般的になっていた『男性についての本』というジャンルがすでに存在していたからである。このジャンルは、大衆心理学、素人の歴史学、気短な神話生成から成る混合物であり、私はそれらを嫌悪していた」と吐露している。

コンネルは言う。「男性性についての書物を書くことで、こうした男性についての本のジャンルの存在によってまさに創り出されている男性についての想像上のアイデンティティを強化することに荷担するようなことはしなかった」と。

しかし徐々に、女性学的なジェンダー論の深まりと、社会制度における不平等是正と、それらに対する男性の貢献や役割、男性性のもつ課題を理論化するためにも、そして男性の間でのジェンダーのパターンの多様性を記し、説明するためにも、男性研究のための一冊の書物には価値があるのだと納得していったと語る。こうして本書は編まれた。

3. 日本でも男性性ジェンダー研究が活発に

日本でも男性性ジェンダー研究が活発になっている。男性が引き起こす事件が散見

されるからということもある。なんでもランキングにするのはいかかと思うが世界比較のジェンダーギャップ指数で 120 位（2021 年）の社会だと不平等が強調されたからかも知れない。男性と男性性の研究、男性学は、私も 1990 年頃から取り組みはじめたのでずいぶんと時間が経つ。

その当時に組織された関西を中心としたメンズリブ研究会に集う男性たちが、当時は女性学、フェミズム、ウーマンリブとされていたことに応答して男性の体験を語る会を行っていたことが始まりである。さらにメンズリブ研究会のなかにフリーメン研究会をつくり、米国の臨床心理士、ダニエル・ソンキン（Sonkin, Daniel Jay & Durphy, Michael, Volcano Pr, 1989）の書物を輪読していた。1990 年頃である。*Learning to live without violence* という書物である。これはアメリカの脱暴力プログラムで使用されていたテキストである。後に私も解説を書かせていただき、翻訳された（＝2003. 中野瑠美子訳『脱暴力のプログラム—男のためのハンドブック』青木書店）。

また、男性問題に取り組む仲間たちと「男のための非暴力研究会」と名付けて「一日グループワーク」を実施したのは 1995 年だ。メンズセンターが主催していた男のフェスティバルのなかで開催した。それ以降、この研究会名でグループワークを定期的で開催した。専門家主導ではなく当事者たちの試行錯誤だった。このときの模様は NHK「クローズアップ現代」等で番組になった。その後、メンズサポートルームと名付け、現在もその時以来の仲間たちが持続的に開催している。

こうして 1990 年代とおして男性問題に

取り組む気運を高めてきた。その頃、『男がみえてくる自分探しの100冊』(かもがわ出版1997年、中村正／中村彰)を編集した。その時までには書かれていた男性を主題にした書物を一冊一頁で紹介した。かなりの数の書籍をリストアップし、セレクトしたので200冊くらいは目をとおした。しかしそれらは数冊を除き男性研究を主目的にしたものではなく、男性・男性性(男らしさ)に関連することが書かれていると私が恣意的に判断したものを選書した。しかし作業としては楽しいものだった。

日本の男性学は女性学・フェミニズムに伴って来た。その象徴が『男性学(新編日本のフェミニズム12)』(岩波書店2009年)である。これは日本のフェミニズムシリーズの一環で、しかも別冊扱いだった。内容は次のようだった(下線部分を私が執筆した)。

I メンズ・リブ●メンズ・リブのすすめ●フェミニズムへのとまどい●シングルの権利●男らしさの神話—「リアルマン」って、どんな奴? /II 男性学の誕生●男性の自己探求—男の性もまたひとつではない●抑圧された男性●男性の性アイデンティティ〈男〉と〈非男〉—性差による言葉のポリティクス/III 男のセクシュアリティ●「攻撃性」神話—「戦争と性」にまつわる神話—兵士は殺し殺されるために女を犯す●性的他者●買春と男性/IV 家事・育児する男たち●主夫革命●男の子育て●「半分こ」イズムの実践/V 企業戦士たち●企業中心社会の抑圧●捨てられる夫たち●滅私奉公のツケ/VI ゲイ・スタディーズ●男性同性愛者の社会史●カミング・アウト両親への手紙●ゲイの対幻想/増補編 I 男性学の発展●メンズ・リブ日本の男性運動のあゆみ●男性学の発展「男」をどう見るか●ゲイ・セクシュアリティ同性愛者の声が聞こえるか●男性史『男性史』刊行にあたって/増補編 II 暴力と男の身体●脱暴力の技法

—DV 加害者をどうするのかという問題が問いかけると●同時代の男性学—殺す男たち●身体の声に耳を澄ます—男性更年期●ハゲとからかいの政治学★

男性学と呼ぶにはまだ歩みだしたばかりの感がある内容だ。しかしここ数年、男性学的な研究、男性・男性性に関する書物が増えてきた。恣意的ではあるがランダムにセレクトすれば次のようなものが浮かぶ。

★工藤保則他編(2016)『〈オトコの育児〉の社会学: 家族をめぐる喜びととまどい』ミネルヴァ書房★アラン・コルバン他監修/鷺見洋一他訳(2016~2017)『男らしさの歴史 1~3』(男らしさの歴史・全3巻/「男らしさの創出 [古代から啓蒙時代まで]」「男らしさの勝利 [19世紀]」「男らしさの危機? 20-21世紀」)(男らしさの歴史/全3巻)★武田砂鉄(2017)『マチズモを削り取れ』集英社★斉藤章佳(2017)『男が痴漢になる理由』★平山亮(2017)『介護する息子たち: 男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房★巽真理子(2018)『イクメンじゃない「父親の子育て」—現代日本における父親の男らしさと〈ケアとしての子育て〉』晃洋書房★レベッカ・ソルニット著/ハーン小路恭子訳(2018)『説教したがる男たち』左右社★斉藤章佳(2019)『「小児性愛」という病—それは、愛ではない』ブックマン社★レイチェル・ギーザ著/富田直子訳(2019)『ボーイズ 男の子はなぜ「男らしく」育つのか』DU BOOKS★グレイソン・ペリー著/小磯洋光訳(2019)『男らしさの終焉』フィルムアート社★ロバート・ウェブ著/夏目大訳(2021)『「男らしさ」はつらいよ』双葉社★清田隆之(2019)『よかれと思ってやったのに 男たちの「失敗学」入門』晶文社★熊谷謙介(2020)『男性性を可視化する〈男らしさ〉の表象分析』(神奈川大学人文学研究所、青弓社★ぼくらの非モテ研究会(2020)『モテないけど生きています—苦悩する男たちの当事者研究』青弓社★齋藤早苗(2020)『男性育休の困難 取

得を阻む「職場の雰囲気」』青弓社★杉田俊 (2021) 『マジョリティ男性にとってまっとうさとは何か—#MeToo に加われない男たち』 集英社新書★周司あきら (2021) 『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』大月書店、★松岡宗嗣 (2021) 『あいつゲイだって アウティングはなぜ問題なのか?』 柏書房★ラファエル・リオジェ著/伊達聖伸訳 (2021) 『男性性の探究』講談社、★エマ・ブラウン著/山岡希美訳 (2021) 『男子という闇—少年をいかに性暴力から守るか』 明石書店、★赤川学他著 (2021) 『なぜオナニーはうしろめたいのか』 星海社新書、★斉藤章佳 (2021) 『盗撮をやめられない男たち』 扶桑社★西井開 (2021) 『「非モテ」からはじめる男性学』 集英社新書★國友万裕 (2021) 『マスキュリニティーで読む 21 世紀アメリカ映画』 英宝社★津止正敏 (2021) 『男が介護する-家族のケアの実態と支援の取り組み』 中公新書★澁谷知美 (2021) ★清田隆之 (2021) 『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見えた生きづらさと男らしさのこと』 扶桑社★高橋愛 (2022) 『「男らしさ」のイデオロギーへの挑戦—ジェンダーの視点からメルヴィルを読む』 晃洋書房★多賀太 (2022) 『ジェンダーで読み解く—男性の働き方・暮らし方: ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために』 時事通信出版局

翻訳書も含めてずいぶんと男性研究を意識した書物が多くなってきた。コンネルも懸念していた無意識な男性論、「一般的になっていた『男性についての本』というジャンル」ではない。もちろんそうした書物もビジネス書、啓蒙歴史書、説教本を中心にして相変わらず量産されているが、それらとは異なる傾向が顕著にみてとれる。先に紹介した『男がみえてくる自分探しの 100 冊』は 1996 年までの書物だけなので、それ以降を対象にすればさらにかなりの数の男

性学的な書物が浮かびあがることになる。戦争・兵士、暴力・体罰・ハラスメント、ケア、少年・男の子、セクシャリティ、労働・働き方、家族問題、白書・黒書のようなデータ集等と領域毎に区切っていけば、明示的に男性学や男性性をうたっていない内容でも男性研究的である書物がある。こうしたものをストックしていくビブリアーカブスがネット上にあってもいいだろう。公刊されてはいないが、博士論文・修士論文や学士卒業研究にも秀逸なものがある。そのなかの男性研究書のひとつ、末尾に掲載した『現代思想』(2019 年 2 月) が「男性学特集」だったことは特記できる。そこに私は「暴力の遍在と偏在—その男の暴力なのか、それとも男たちの暴力性なのか」と題して寄稿した。

4. 男性学研究をとおして深まる研究課題があること

男性性は、時代や文化によって多様なだけでなく、ひとりの人間の内ですら矛盾した様相を見せる複雑な概念である。男らしさの複数性や相互の権力関係、男性性と社会構造との密接な関連性等、多岐にわたる争点がある。男性学は、男性を集団カテゴリーとしてはひとくくりにして論じることになるが、そうすることの限界もある。ジェンダーの二元的な把握を強化することになるからだ。だから男性だけではなく男性性(男らしさ)という並べ方をする。さらに原著もマスキュリニティーズと複数形である。

しかしジェンダーの非対称性の極には男性・男性性があることを指摘しないとジェンダーの基本的な問題はクリアにならない面もある。集団的なカテゴリーとしての男

性と、いろいろな交差性のなかで特性をもつ男性諸個人とを区分けして論じることになる。非対称性のなかの権力勾配・資源配分の差異があるので、マジョリティではあるが男性も個人としては多層的である。

その交差性の原理のなかにヘゲモニックな男性性は作用し、男性としての行動や意識を枠付ける。そうした男性的なるものを把握する概念として、ホモソーシャル（男同士の絆）、ミソジニー（通例は女嫌いと言われるが正確ではない）、マッジョ・マチズム、男性中心主義社会等がある。ジェンダーは秩序として存在しているので非対称性という権力勾配があり、男性をそこに拘束する。ヘゲモニックな男性性もそこに係留して構築される。この関係性のなかで多様な男性が構成される。こうした非対称な権力勾配に抗うには力がある。日常生活のジェンダー的相互作用から国家間の暴力まで、男性的原理が作動するからである。

こうして、ヘゲモニックな男性性を中軸にして複数の男性性（マスキュリニティーズ）がそこに布置されていく。目次で示した例としては四つの男性グループがこの書ではインタビュー調査されている（4章から7章）。

さらに応用的な研究が必要な領域と主題群が指摘されている。それは政策形成や専門的実践に関するものである。次のようなものが示されている。

- ①教育—この仕事は、学校、若者のアイデンティティ形成、学校でのしつけやハラスメントの問題そして少年の学習問題に関わって男性性の形成について考察している。
- ②健康—ジェンダーの形成は男性と少年の健康と安全、さらに再生産と性的な健康問

題における男性の役割に関連している。

- ③暴力—男性性についての知識は、DVや性的暴力から制度的な暴力、戦争にまでわたる広範な男らしい暴力の防止に関連している。

- ④父親—この課題は特に父親としての子どもへの男性の関わり方を考察している。つまり、伝統的な男性性の諸困難、父親になる過程と家族関係における新しいモデルの探求である。

- ⑤カウンセリング—男性性の構築を理解することは男性のカウンセリングやサイコセラピーを効果的なものにする際に重要となっている。個人カウンセリングでもグループカウンセリングでも同じである。ジェンダー関係やジェンダーの特有性に関心を払うという方法である。

男性・男性性と関わる中範囲の領域固有性のある主題群である。男性性ジェンダーの視点も加味してそれぞれの領域で議論されている諸課題と交差させる。別言するとこれらの問題に男性性ジェンダーの視座を組み込むことでより鮮明になることがある。この連載では暴力の話題が多いがそこに男性性ジェンダーの作用を交差させることは必須の作業である。性犯罪、性虐待、セクシャルハラスメントの加害は男性がほとんどだからである。①から⑤まで各領域に男性性ジェンダーの作用の視点を欠かすことはできない。特に④の父親問題は男性性と直接関連しているし、虐待を介して暴力と交差する。⑤のカウンセリングに男性心理学的な理論と実践が反映されるべきだろう。ジェンダー秩序のなかではヘゲモニックな男性性が磁場のようにして動態をつくりだす。教育と健康についても男性性ジェンダ

一との交差は実りある議論となる。

この 5 つの論点設定には共通性がある。同じジェンダー秩序のある社会に生きていても男性諸個人のジェンダー体験の差異があることを視野におさめて理論化する必要がある点だ。非対称性権力勾配のなかにある多様性であり、ヘゲモニックな男性性のなかでの異なりがあり、脱ヘゲモニックな男性性の戦略を組成させることの論点という意味である。とくに暴力から脱暴力への研究は本連載とも関わり一貫して関心を寄せてきた点である。

例示をしておこう。本書の補論のなかに「暴力の問題—対人的暴力と国際的暴力—」という記述がある（以下の引用はすべてこの補論から）。暴力と男性の関係の事実は徐々に問題として認知されてきた。「たとえば湾岸戦争のような軍事的対決であれ、家族のなかであれ、暴力を正統化するような支配的形態の男性性はどんな役割を演じているのか。ジェンダーは暴力の文化においてどんな役割を演じているのか。いかなる人格発達のパターンが男性や少年を暴力へと導くのか。これらは現在、平和を維持するためにその問題や含意について積極的な論争となっている」と語る。「しかし、私たちはその結びつき、つまり心理社会的、構造的、言説的解釈のこれらすべてが暴力を促進させるものとしてどのように関わりあっているのか」にまだ応答できていないという。もちろん「ジェンダーは暴力を理解する単純な鍵を提供しているのではないことは明らかである。暴力は多元的な原因をもち、社会的文化的に変化し、時代を超えて変化することは知られている。殺人の比率と地域的な貧困に関係があるという重要な

事例も知られている。つまり、男性性は暴力の固定した説明変数としては解釈できない」とも指摘する。

本書が示しているように、「男性性は多様であり、歴史的に変化する。オーストラリア、ドイツ、日本の比較研究は、暴力犯罪の変化する比率が異なる文化における男性性の特定の歴史に結びついていることを示している。こうして私たちはいかに社会的緊張が特定の担い手によって暴力として表現されるのかについて理解するために、特定の男性性を探求しなければならないことになる」と解説している。若い男性によるホモフォビア的な殺人の事例を扱った研究として「異性愛的パニック」という概念を紹介している。暴力の解釈について男性性ジェンダーを介して中範囲の概念を構成すべきという視座である。ジェンダーの二項対立を回避する男性学の提唱ともいえる。社会構造としての暴力問題ではなく、個々人が振るう暴力を扱う社会病理学的な暴力研究においてこの中範囲の概念は不可欠となる。「行為としての社会病理」は、たとえば暴力を振るわない男性がいることの説明、男性同性愛関係における DV の解釈、親密な関係においてだけ暴力を振るうことの説明等として考察をしていくことになる。

コンネルは「ある暴力防止のプログラムは 1990 年代に男性性の研究からの概念を用いて始まった。それは広範な公共的キャンペーンと若者たちや刑務所入所者のような困難なグループへの対応の戦略の開発という双方を含んでいた」とし、男性性ジェンダーについて中範囲の領域を設定して暴力論として解くことの必要性を強調した。

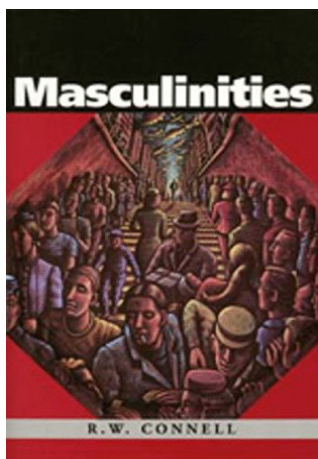
「この戦略は拡大されるべきことは重要な

ことだが、男性性の理解の刷新によって支えられることも大切だ。この作業への鍵は暴力と暴力防止など、男性性の状況的な特殊性を把握する能力である。また、個人のレベルから制度や国家のレベルへと移動していく能力である。今後もお男性性についての理解を深めることは、平和的で生き残りうる社会を構築するのに必要な知識の重要な部分となっている」と言う。単に暴

力や平和を語るだけではなく、男性学研究を介してこそそれらの主題も深まると指摘するのだ。男性学研究を介してこそ深まる領域がある。そうした刺激的な論点に満ちた書物となっている。

しかし申し訳ないことに本書は高額である。税込みで8580円だ。図書館に購入請求して読んでいただくことを切に願う次第である。

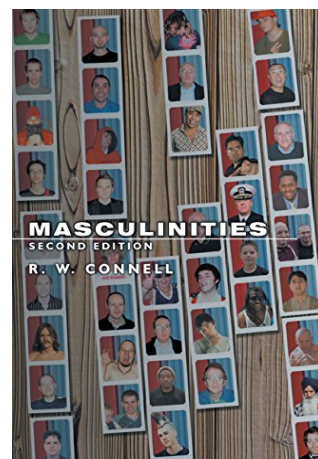
巻末資料（書影）



1995年第1版



翻訳本 2022年



2005年第2版



男性学の変化：独自に男性学 2019年『現代思想』

2011年フェミニズムの中の男性学研究

なかむらただし（立命館大学/臨床社会学・社会病理学）